

『御伽人形』の創作手法——典拠との関わりをおとして

岡 島 由 佳

はじめに

『御伽人形』（宝永二年（一七〇五）刊）は、六卷六冊、全四十三話から成る、上方系怪談・奇談浮世草子である。作者の苗村松軒は、『伊勢物語大成』（元禄一〇年（一六九七）刊）などを著し、和歌の注釈を行ってきたが、怪談・奇談の著作については、『御伽人形』のみが確認できる。別人と理解されてきた苗村丈伯と苗村松軒には同一人説もあるが、本稿ではひとまず措く。

これまでの『御伽人形』の先行研究では、主に典拠との比較をとおして論じられてきた。花田富二夫氏は、卷一の一、卷四の二、卷六の三における先行作品の影響を紹介している。堤邦彦氏は、花田氏が指摘した三話を含め、その他の典拠・類話を整理している。過半が、『因果物語』『伽婢子』『宿直草』『狗張子』『諸国百物語』『百物語評判』『奇異雑談集』などの寛文・

貞享期の諸作、および『古今犬著聞集』の伝える皿屋敷伝説・累解脱譚といった近世説話に着想していると明らかにした。素材面からみた本書の意図は、産女、猫又、累伝説、皿屋敷伝説、墓中出生譚など、世上に流布した先行作品と、その周辺に位置する近世説話の翻案にあると考察し、流布した怪異巷説を簡素化して利用していると述べている^{①②③}。近年の研究では、明らかにした典拠を踏まえて、徳田清香氏が『御伽人形』のなかに描かれた怪異を怪異別に論じている^④。

『御伽人形』の典拠・類話について、大半（四十三話中、二十九話）が明らかに一つあるが、堤邦彦氏の『御伽人形』考の論考以降、新たな典拠や類話の指摘がほばないのが現状である。本稿では、これまで典拠不明だった話を取り上げ、新たに典拠を指摘するとともに、典拠同士の内容の関わりについても検討した。『御伽人形』の典拠の過半が、近世前期の怪異小説に着想を得ているとされてきたが、『古今著聞集』『宇治拾

遺物語』『甲陽軍鑑』などからの利用も確認できることを述べる。
『御伽人形』全話の典拠・類話については、本稿末尾に典拠一覧表を付した。典拠との比較をとおして、『御伽人形』の創作手法を明らかにすることが目的である。

一、『御伽人形』の内容——怪異が含まれない話

序者の増田円水は、「松軒子が茶吞がてら。耳に聞、目に見し怪談を記録し」(『御伽人形』序)たと記すが、堤精二氏が「怪談を扱っていない話もある」と指摘するように、怪異が含まれない話は、四十三話中、四話(卷一の二、卷二の二、卷五の八、卷三の一。卷三の一は、次節で後述)確認でき、それらは武辺咄などに該当するといえる。怪談・奇談集の性格を持つ作品は、怪談・奇談に関する話に研究が偏る傾向があるが、『御伽人形』全体から特徴を分析するために、以下、怪異が含まれない話をまずはみてゆく。

卷一の二「善悪の道踏分し木履」は、次のような話である。真壁平四郎という若侍が主人の御供をするが、雨中で足を挫き木履の鼻緒が切れた主人が腹を立て、木履で平四郎を打擲する。主人の無理非道の行いに平四郎は堪忍ならなかったが、怒りを鎮め、出家して牧尾寺で昼夜修行に励み、その後、法名を覚玄と改め、主人の元へ立ち寄り、以前の木履を取り出して、「仏種は縁よりおこるならひ」だと、かえって主人に感謝を述べる。

本話は、『本朝高僧伝』卷十九・淨禪三之一「奥州円福寺沙

門法心伝」において、「法心俗ノ名は平四郎嘗て真壁の郡守に仕ふ。郡守事有て履を以之を蹴る。心憤然として世を厭ふ」と記される「法心」の話に拠っている^⑤。『奥の細道』には「瑞岩寺に詣。当時三十二世の昔、真壁の平四郎出家して入唐帰朝の後開山す」とある。『本朝高僧伝』に伝わる内容と『御伽人形』卷一の二は、大枠は同じであるが、平四郎の伝記と比較すると、『御伽人形』は「牧尾寺」で修行したことや、与えられた法名に違いが確認できる。ちなみに、この真壁平四郎と木履にまつわる講談「雲居禪師血染の木履」は、主人の草履取りであった平四郎が、主人の木履を尻に敷いていたと誤解され、主人に木履で打擲されたことが堪忍ならず、その後、出家して修行に励み、法心の名を与えられ、国師の位になった出世物語として知られている。

次に、卷二の二「大将の兼約は千枚道具」は、天正のはじめ「柴田一益」が、関八州を治めた褒美として信長秘蔵の「うばぐちの茶壺」を拝領した話である。『御伽人形』では、「信玄公その武勇のたくましき事かんじ給ひ、手づから茶壺取出させ給ひて、いくとせか馴て久しきうば口を人にすはせんことをしぞ思ふ」と記している。「柴田一益」が信長秘蔵の姥口釜を所望し、褒美として茶壺を渡したのが、「信玄」ということになっているが、類話として指摘されている『茶窓閑話』では、「信長公」から「姥口といふ釜」が「柴田修理亮勝家」へと下賜されている^⑥。この他に『当代記』の天正九年二月二十四日の記事にも「茶

窓閑話』と同様の内容を確認することができる。⁽⁸⁾ 右二つと『御伽人形』巻二の二とは、人名に違いがあるが、茶器を下賜する話からは、当時の戦国武将にとって、茶器は非常に価値あるものであったことが伺い知れるのである。

三つめに、巻五の八「看板に偽ある鸚鵡太夫」は、『百登瓢』^{たん}（元禄一四年（一七〇一））巻五の十七「孔雀太夫」の、女が若衆と偽っていた孔雀太夫の話を踏まえたものであろう。

怪異が含まれない四話中、三話について新たに指摘した典拠や類話と思しき話と比較すると、人物名は伝承どおりに記さず、改変していることが明らかになった。典拠を利用しつつも、そのまま記さずに書き換えることが『御伽人形』の創作手法といえる。

次節で、怪異を含まない残り一話（巻三の一）については、『甲陽軍鑑』との関わりをとおしてみてゆく。

二、『御伽人形』における『甲陽軍鑑』の利用

巻三の一「法師の腕だて寺跡論」は、信玄公の城下、妙国寺の兄弟子教知と弟弟子教山による寺跡問題を、四人の奉行が裁き、その内容について、原美濃守、小原金弥、山形が聞き、原美濃守が批評した話である。原美濃守が、四奉行の公事について「一人／＼の心入を評して見るに、大ばが悪も観音のじひ、はんとくがぐちももんじゆのちゑとわかつたり」と述べる。『提婆が悪も観音の慈悲、榮特が愚痴も文殊の知恵』とは、提

婆のような悪人も、大慈大悲の観世音と同じことで成仏でき、榮特のような愚鈍な者も大悟すれば、智慧ある文殊と同じことだという意味である。山形がその批評の真意を問うと、原美濃守は、次のように語る。

一ばんの御奉行、「あに弟子かたに随成ゆづり状あるうへは、論するに及す」との給ひしは、大ばがあく、二ばんめの御奉行「いや／＼両方にゆづり状あれば、左は成まじ」と申されしは、観音のじひ、三ばんめの御奉行、「両ほう共にゆづり状あるうへは何ともわけがたし。我等のしあんにおちず」とのたまひしは、はんどくがぐち、四ばんめの御奉行、「あにではしは、もはや三年寺をもちし事なれば、ゐんきよいたし、おと、弟子に寺をゆづりやしなはれよ」とのたまひしは、もんじゆのちゑ也

原美濃守は、四奉行の公事のうち、四番目の奉行が、兄弟子は三年の間、住持となつたので隠居し、弟弟子に寺を譲るよう語った裁きを最も評価している。

本話は、『甲陽軍鑑』品第四十八巻十八の九「信州更級出家公事之事」⁽⁹⁾との関わりを見いだせる。梗概は次のとおりである。信州更級真光寺という律宗の寺に、円蔵院という住持がいた。二人の弟子を持ち、兄弟子を善万坊、弟弟子をりんせつという。円蔵院は弟弟子に跡を継がせようと考え、りんせつを学問修行に出すが、その間に円蔵院は亡くなり、兄弟子が跡を継ぐことになる。修行から戻った弟弟子と、兄弟子は寺跡について公事

をする。そのときの四奉行が、「今井伊勢守、武藤三河守、桜井あきの守、今福浄閑」である。今福浄閑は、「此寺ハ弟でしの寺」であると裁き、桜井あきの守は、兄弟子が「むち僧」であつても、粗くあてがつては慈悲に欠けると裁く。武藤三河守は、弟弟子が学問修行ゆえに、師匠の死に目に会えなかったこと、また、兄弟子が、師匠の末期の約束ゆえ寺を建立したことを、双方に道理があると、善惡の分別もない裁きをする。今井伊勢守は、善方坊は四五年もこの寺に住み、六十歳になるからりんせつに跡を譲り、弟弟子は、兄弟子を敬つて、師匠の形見だと思つて、寺を一つ兄弟子に与えるように言う。

この公事の翌日、四奉行の裁きを批判してみよ、と内藤修理に言われた横田十郎兵衛は、「今福浄閑のあらきさばきは太ば、桜井殿左右方ぶじにと有はくわんをん、武藤三河、両方理なりと分別わからぬははんどく、今井伊勢守ことく理非をわけらる、はもんじゆ」と裁定する。

『甲陽軍鑑』の内容と、『御伽人形』巻三のの内容は、寺や兄弟弟子、四奉行、公事を聞いた武将や、その公事を批評した武将の名前も異なるが、内容はほぼ類似している。『甲陽軍鑑』でも、四番目の奉行（今井伊勢守）の裁きを四奉行のうちで最も評価している。興味深いことには、この兄弟弟子の寺跡争いの公事に関する話を、信玄の同席する夜話で語っているのである。『甲陽軍鑑』巻十四の該箇所を次に引用する。

ある夜、信玄公御前二而、夜の御放二、長坂長閑申上るハ、

「信州さらしな、りつそう出家の公事、今福浄閑あらくさばき、桜井あきの守じひに、武藤三河分別なきさばきあるを、今井伊勢守ことく理非わけたる儀、横田彦十郎に、「ひはんして見よ」と、ざれ事ながら内藤修理正申せば、彦十郎則ひはんしていわく、「太ばがあくもくわんをんのじひ、はんどくがぐちももんじゆのちへ」と沙汰仕り候」と長坂長閑申せば、信玄公きこしめし大きによろこび寺跡を争つた兄弟弟子の公事を裁いた四奉行に対する横田の才覚ある批評を聞いた信玄は、大いに喜んだという。夜話では、「御伽」として、怪談のみならず、こうした公事に関する批評が語られ、情報交換が行われていることが伺える。

三、『御伽人形』の信玄にまつわる話と『甲陽軍鑑』

ところで、怪異の要素がない巻三の一だけでなく、信玄公の城下である「甲斐」が舞台で、なおかつ、武田信玄との関わりのある話（巻一の一、巻二の一、巻三の一、巻四の八）に注目すれば、それらはすべて『甲陽軍鑑』と関係があることがわかった。

巻一の一「思立矢あやまたぬ拳」は、次のような話である。甲斐信玄公の城下に、油屋勘助という有徳人の女房がいた。女房は難産の末に亡くなり、恵林寺に葬られた。それ以降、柿の木のもとに来て泣き叫ぶ。陰陽師が弔つたが験がない。信玄の家臣山形三郎兵衛が、ひそかに勘助の家に来て、化生の胴中を射抜いた。信玄は正体に名前を付けよと命じたが、誰もわから

なかった。そこへ板坂法印が、『本草綱目』を引いて、難産で死んだ産女（姑獲鳥）であると解き明かす。信玄は、板坂法印の博学ぶりを感心し、三百貫の知行を増した。

他作品で信玄が登場する怪談では、怪異の正体を見極める名將として書かれる話が確認できる。例えば、西鶴『新可笑記』（元禄元年（一六八八）巻四の二）歌の姿の美女二人の末尾に記すのは、離魂病によって分身した家臣の女房のうち、どちらが怪異かを暴くため、狸の嫌がる青松葉を折りくべて煙らせ、信玄が正体を見抜いた話である。同想の話は、金蛇親主翁著『雪窓夜話』（安永八年（一七七九）刊）巻二「智勇劈異病」の「説」にも確認できる。離魂病によって分身した家臣の女房を馬屋につなぎ止め、蚊が刺したほうが化物であると判断する。信玄の正しい眼力を褒めた二話に対して、『御伽人形』巻一の一においては、信玄も「化生」の正体を知らない一人であり、信玄の名將ぶりは封印し、板坂法印の博学を際立たせることにながっている。

板坂法印とは、『甲陽軍鑑』巻八に記される、十二名の信玄の御伽衆のうちの一人であり、侍医として信玄に仕えたことが確認できる。『御伽人形』巻一の類話として指摘される『奇異雑談集』では、産女の正体を『本草綱目』を引きながら解き明かすのは「古老」である。一方『御伽人形』では、『板坂法印』という御伽衆を設定している。つまり、巻頭話は、信玄の周辺に存在する人物を描き、なおかつ怪異の正体を明らかにする御

伽衆の博学を強調した内容になっている、といえる。御伽衆は、將軍や大名の見聞を広めるために「伽」をしていたとされる。例えば、『御伽人形』の作中には、「夜話」（巻一の三・巻一の四）や、「御はなしの衆さしつとひ」（巻四の一）、怪談・奇談を目撃した話などが確認できる。書名に「御伽」と冠し、巻頭話に御伽衆が登場する『御伽人形』は、「御伽衆」によって、語られた「御伽」の要素も強いと思われる。

続いて、『御伽人形』巻二の一は、『狗張子』巻二の四も流用した『甲陽軍鑑』の記述を踏まえて作られたことが想像できる。『御伽人形』巻二の一の原隼人の墓中出生譚は、『狗張子』巻二の四「原隼人佐謫仙」が典拠であることが堤邦彦氏によって指摘されている。『狗張子』巻二の四は、『伽婢子』巻五の四「原隼人佐鬼胎」とつながりのある話である。『狗張子』巻二の四について江本裕氏は、「明らかに『伽婢子』の続編として書かれているが、本作では明暦二年版『甲陽軍鑑』の記事から流用していると思われる部分が多く見られる」と指摘しており、また「『伽婢子』で異常出生した主人公の造形を『甲陽軍鑑』の記事によって補っている」と述べている。このように、『狗張子』巻二の四を利用した『御伽人形』の信玄にまつわる話もまた『甲陽軍鑑』を利用しているといえるのである。

その他にも、巻四の八は、信玄と関わりがある。これまで『百物語評判』四の八が「導入部のみ」典拠として挙げられてきた一部であるが、『甲陽軍鑑』巻十一・六十六との関連が指摘で

きる。以下、二話を比較してみてゆく（以下、傍線筆者）。

『御伽人形』 卷四の八「伽藍の第一雪隠の棟上」

源のよしつね雪隠へ行給ふたびごとに「山へゆかん」と仰られしを、かめゐ・かたをか・いせ・するが「いか成事やらん」とふしんはれやらざりしが、ありときへんけい大将にむかい、「いつも雪隠へ御座のとき、山へゆかんと仰られしは、いか成故事にて候はんや」と御たづね申あくれば、よしつねうちわらい給ひ、「草木かたへぬといふ心じや」とのたまへば、をのゝ腹をか、へとよめきわらひけると

『甲陽軍鑑』 卷十一・六十六「甲府御館御かんじよ之事」

しかれば、信玄公、かんじよを「山」と被仰候故、甲州各々「山」と申候。「誰人も何と申す候こと、山のこじ、信玄公へとい申人なくして、終にしられず」と、（中略）其後、長阪源五郎にとへば、源五郎は、「どうりかな、山にハくさ木がたゑぬ」と申す。小山田彦三郎にとへば、「にわふものたへず」と申候。

右の二話の傍線箇所注目すると、なぜ雪隠・閑所（筆者注：雪隠）を「山」と呼ぶのか、という問いに対して「草木（臭き）がたへぬ」と答えている。大きく異なるのは、『御伽人形』では、源義経が発言したことになっている。人名を書き換えるのは、『御伽人形』の創作手法であると本稿で確認してきたとおりで

ある。人名の違いはあるものの、笑話的要素のある信玄にまつわる話も『甲陽軍鑑』から利用していることが考えられる。

四、「ハナシ」の素材——説話を組み合わせた話

先学の研究によって、『御伽人形』の過半が、『因果物語』『伽婢子』『狗張子』『諸国百物語』『百物語評判』『奇異雑談集』等の寛文から貞享期の諸作である近世説話から着想を得ているとされてきた。それに異論はないが、前節で確認してきたように、信玄にまつわる話では、『甲陽軍鑑』といった軍学書からも、武田家周辺の武辺咄や笑話を取り込まれていることがわかった。本節では、近世期以前に成立した説話集からの利用が確認できる話を取り上げる。以下に論じるⅠ、Ⅱ、Ⅲは、これまで典拠が明らかになっていない話である。典拠をとおして『御伽人形』の特色を明らかにする。

Ⅰ、『御伽人形』 卷二の三「力こぶ出すぐれた高名」

卷二の三「力こぶ出すぐれた高名」は、次のような話である。越前の国の有信が、禁裏へ相撲のために上る折、涼を求めて池に足を入れてみると、蛇が足に纏いつき、水中に引き入れようとする。蛇と男の力比べが水中で行われ、蛇の胴体が真二つにちぎれる。有信の力は、七十五人で縄を引かせた同程度とわかり、人に劣らない力だと思つて慢心しながら、里を離れていく

と、二十歳ほどの美しい女が磐根の水を汲み、頭に桶を抱えている。有信は、その女に心惹かれ、家へとついていくと、女から高慢になって相撲を取ることを戒められ、強飯を噛み割って喰うように勧められる。その後、女の腕から力瘤を与えられた。

本話は、前半の有信と蛇との力比べを『宇治拾遺物語』巻第十四の第三「経頼蛇にあふ事」から、後半の美しい大力の女の話『古今著聞集』巻第十（相撲強力第十五）三七七「佐伯氏長強力の大井子に遭ふ事並びに大井子水論して力を顕す事」から利用していると考えられる。典拠は、どちらも「相撲」「大力」が関係する話である。『宇治拾遺物語』巻第十四の第三では、経頼という相撲取りを蛇が川へ引き入れようとするので、力強く踏ん張ると蛇が真二つに切れてしまった。縄を経頼の足につけ、六十人ほどで引っ張ってみると、経頼の力は、百人程度の力を持っていたと思われる、という話である。¹⁴⁾

後半の『古今著聞集』巻第十（相撲強力第十五）三七七は、佐伯氏が、相撲の節に召されて、越前から上るときに、近江国で水を汲む「きよげなる女」に出会う。氏はその女に惹かれ、女の家に向かう。氏が相撲の節で招かれていくことを語ると、女は力の付くように養おうと言って、その夜から「こはき飯」を与える。七日も過ぎると、ようやく噛めるようになり、二十一日も経つと、みごとに噛み砕くことができるようになったという話である。『昔物語語治聞集』¹⁵⁾には、『古今著聞集』巻第十（相撲強力第十五）三七七の後半に該当する、大井子の水論

の箇所が省略されており、『御伽人形』巻二の三も同様に記されていないことから、『古今著聞集』の利用ではなく、『昔物語語治聞集』からの利用とも考えられる。

さて、『御伽人形』巻二の三と典拠とは何が違うのか。『宇治拾遺物語』では、蛇との力比べに勝った経頼の力に対して、百人力であることを讃えているのみである。一方の『御伽人形』においては、蛇との力比べに勝った有信は「慢心」を起こしていたが、女が慢心を慎むように言って突き出すかと思うと、有信は山中に杳然と立っていたので、「扱は我力を日比かうまんせしゆへ、天狗のしよゐ」ではないかと得心する。「慢心」の者に対して、「方に自慢すべきこと有まじき事成べし」と、話の末尾に教訓的言辞が記される点が、典拠との最大の違いである。武勇を誇る話から、慢心を防ぐ教訓的な話へと変化していることが読み取れる。

Ⅱ、『御伽人形』巻五の二「因幡国鳥取の沢大蛇」

巻五の二「因幡国鳥取の沢大蛇」も典拠不明の話である。内容は、次のとおり。

因幡国鳥取の城下にある池には大蛇が棲むため、人々は恐れていた。日頃から力自慢の紙屋与三兵衛が熱湯を大蛇にかけ、退治した後、七日さらして土中に埋めた。そこへ山伏が現れ、祟りに合わない方法として大蛇の両目に針を刺すことを教える。

そのとおりにすると、与三兵衛の両目が痛み出し、亡くなつてしまつた。「武にあらざしていわれざる武へんをこのみしゆへ、はやくむくひの来りけるよ」と、人は蛇の祟りを恐れた。

大蛇に熱湯をかけて退治した話は、『古今著聞集』巻第二十・六九九「建保の比北小路堀河邊の女熱湯を注ぎて蛇を殺し祟りに依りて死する事」を利用してゐることが指摘できる。女が湯を沸かしてゐるところへ、三尺ほどの蛇が釜の前にある鼠の穴に入つた。隣の女は、蛇の入つた穴に湯を入れて処理するよう教え、女が湯を穴に入れると蛇は「びりく」と体を震わせて死んだ。翌日、隣の女は煩い、熱いと呼ぶ。修験者が祈禱すると、蛇の霊が隣の女に乗り移り、蛇が焼けただれたのと同じように亡くなつた話である。蛇に熱湯をかけ、その後、蛇の祟りに合う点が『御伽人形』巻五の二前半部と一致する。

後半の、山伏が現れ、大蛇の眼に針を刺すと、力自慢の男の眼が痛み、亡くなつてしまふ話は、次の『因府夜話』（元文五年（一七四〇）〜寛延三年（一七五〇））が類話として挙げられる。長いが確認のため引用する。

『因府夜話』（鳥取県立図書館所蔵本）上「平尾氏、軒大蛇」事

昔、平尾某という人あり、三州（空白）と云所に居たりける、或時下部女近きあたりの河に衣服を洗ひに行くが、急に逃帰り、戸を立ていふやう、大蛇只今我を追来れり、御用心あれがしといふ、平尾氏折節家にあり合せ、其蛇は何

方ぞと云所に、其家の搏風より頭をさし入、梁の上に這入たり、其頭大にして、面に書たる龍の如し、平尾氏聞えたる武功の人にて、忽刀を抜て其頭を斬落す、大石などの落たる如く座席に響きて落ぬ。扱其あたりの人雲の如く集り、是を見る、其中に山伏老人ありけるが、平尾にいふ様、加様の者には必ず雄雌ありて、たゝりをなす事あり、我記念して跡のたゝりを止めんと云、平尾兎も角も頼みければ、針を式本給はり候へとて、其針にて其蛇の眼をさし、暇乞して帰りける。其日より平尾氏両眼つぶれて、日月の光を見る事なし。三年過て元の如くに明かになりしといへり。此山伏は、其蛇の雄か雌にて有けるなるべし。一説に其蛇を斬たる刀を三州鳳来寺に峰の薬師に納むと云り。一説に美濃大垣に被成御座候時の事なりとも云、平尾喜左衛門と云は、其子孫なりとぞ。

平尾某が蛇を殺した後、山伏が現れ、針で蛇の眼を刺すと蛇の祟りに合わないと教える。山伏が蛇の眼に針を刺すと、平尾氏の眼が痛み出して失明する。この内容が、『御伽人形』巻五の二とほぼ一致する。『因府夜話』（元文五年（一七四〇）〜寛延三年（一七五〇））は、因幡地方で語られていた怪談・奇談などを収めたもので、『御伽人形』より後に成立したものであるが、話の舞台や内容の類似から、因幡地方で古くより口承で伝わっていた話と考えられる。あるいは、『御伽人形』巻五の二の話が因幡地方まで伝播する過程で、元の話に「蛇の雄雌」に関す

る記述が付加され、増幅しながら広まったかと推察する。

『御伽人形』巻五の二の前半と後半の話には、「蛇を殺した祟りで亡くなる」という共通した典拠が存在し、それを利用して一話に成したといえよう。説話を組み合わせて利用した場合においては、説話同士の内容に共通項があり、その点が『御伽人形』の典拠利用の特徴として指摘できる。

Ⅲ、『御伽人形』巻二の四「智信勇三徳の武士」

次に、巻二の四「智信勇三徳の武士」の話を取り上げる。本話は、『宇治拾遺物語』二の一〇が、前半の典拠と言われている。前半は、平井保昌が御所からの帰途、盗人に襲われるが、呪むと盗人は震えて立ちすくみ、その後、盗人に絹を与えてやった話である。後半の典拠は明らかになっていない。

四節のⅠ、Ⅱでは、説話を組み合わせて利用した場合の特徴として、説話同士の内容に共通項があることを指摘した。すでに典拠が明らかになっている複数話を利用した典拠同士の内容の共通項の有無をも確認し、巻二の四の後半の典拠について考えてみた。

まず、巻一の一は、「産女（姑獲鳥）」を扱った複数話の利用が確認できる。巻一の四は、『宿直草』巻五の十一「五音をき、しる事」と『宿直草』巻五の十二「堪忍ゆへに徳をとる事」を利用して作られたことが明らかになっている。『宿直草』巻五

の十一、十二は前後の話であるだけでなく、共通して「妻の密通」について記した内容でもある。⁽¹⁸⁾笑話の要素と、密通された夫が「女敵討ち」をせずに、僧のスカンダルを利用して金を得る奇策を取り込んで一話にしている。『御伽人形』巻五の七は、前半を『諸国百物語』巻二の九、後半を『諸国百物語』巻五の十八から利用した話である。典拠の二話に共通するのは、亡妻の後妻に対する「嫉妬」である。

このように、『御伽人形』では、前半と後半で、それぞれ別の典拠を借りて作られた話であっても、共通した題材を掛け合わせて利用していることが確認できる。こうした創作手法が巻二の四の後半でも取り入れられていると考える。前半と後半に共通するのは、盗人に対して「武勇」があることである。

では、『御伽人形』巻二の四の後半を見てみよう。娘は容顔美麗で、かつ武勇、大力は親にも勝っていること、「強盗」が家に入って娘を脅しても、うろたえなかったことが記されている。これらの要素を含んだ話として、『宇治拾遺物語』巻十三の六・一六六「大井光遠妹力つよき事」を典拠と指摘できよう。女の見目もよく、怪力で、動じていないことが共通している。巻のつながりに注目すれば、『御伽人形』巻二の三後半の典拠として『古今著聞集』巻第十（相撲強力第十五）三七七「佐伯氏長強力の女大井子に遭ふ事並びに大井子水論して力を顕す事」を指摘したが、巻二の三後半の典拠は、巻二の三のみならず、巻二の四後半の典拠とも「大井」でつながる。また、本節

四のIからIIIで取り上げた話（巻二の三、巻五の二前半、巻二の四）は『昔物語治聞集』でも収められている。こうした説話集を作者が参考にして作中に取り入れたのではないかと考える。

おわりに

本稿では、これまでに典拠の指摘のなかった話を中心に引き上げ、新たに典拠を指摘しながら、『御伽人形』の特徴を概観してきた。

作品内には、武田信玄、織田信長、明智光秀、武田信玄の家臣、茶人、御伽衆、源義経、佐藤忠信、次信などの、歴史上の大名、武将の名を確認できるが、伝承や典拠と思しき話と比較すると、人物名を変えている箇所も散見でき、歴史の事実を正しく伝えることが目的ではなかったといえる。名前や場所など細かな部分はずらしつつ、読者の耳目を集める話を収めることを主眼に据えていたと思われる。歴史上の人物のなかでも、信玄にまつわる話は巻の顔ともいえる巻頭話に収められており、それらは、『甲陽軍鑑』を利用していることが明らかになった。また、『御伽人形』の一話には、前半と後半で別の説話が取り込まれていた。近世以前に成立していた説話集では、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』などからの利用を指摘したが、あるいは、それらの話を収めた『昔物語治聞集』からの利用とも考えられる。このように、既刊の説話を利用し、前半と後半を共通する話題でつなぎ合わせ再構成し、典拠とは異なる新たな一話に作

り替えることが『御伽人形』の創作手法の一つであった。

元禄から宝永期は、仮名草子の時代に続く、第二の怪異小説ブームが到来し、西鶴以後の小説界は奇談・怪談物浮世草子の復調期と言われている。長谷川強氏は、元禄から宝永の時期の奇談・怪談物浮世草子の特徴は、和漢の典籍を駆使した知識性の標榜や、教訓啓蒙の姿勢、あるいは先行小説からの転用や再構成といった手法が全般に見受けられるという¹⁹。長谷川氏の指摘どおり、典拠との比較をおして分析すると、『御伽人形』においても、既刊の話を二次利用しながら、「ハナシ」を書き記していることが確認できた。それゆえに新味に欠ける部分もある。篠原進氏が一七〇一～一七〇六年までの浮世草子四二作を組上に載せ、試行錯誤する様子を展望した結果、西鶴の小説と比して『御伽人形』もまた「未熟」な作品と評す如くである²⁰。

野田寿雄氏は、西鶴死後に刊行された浮世草子について、「西鶴死んで、浮世草子は八文字本や西沢一風に受け継がれたけれども、その作は西鶴を凌駕することなく、浮世草子それ自体にも生気が無くなって来た。そのときまた、かえって怪異小説が製作されたのである。『拾遺御伽婢子』（宝永一（一七〇四））『御伽人形』（宝永二（一七〇五））『中略』というふうには怪異小説が絶えなかったが、それらは西鶴のころのものとは異なっており、話の提供ではなく、むしろ浮世草子の混乱、あるいはその行きづまりの打開という形で制作されたのである。だから、特に怪談流行があったわけではない。」と述べている²¹。

元禄から宝永にかけて、多くの怪異小説が刊行されたのは事実だが、その背景には、低迷した浮世草子の問題が絡んでいたのである。こうした、元禄から宝永時代の浮世草子の評価から見れば、『御伽人形』もまた、売れっ子作家には劣るマイナー作家による怪談・奇談物浮世草子として位置づけられるだろう。だが、書承、口承による説話をそのまま利用せず、名前や地名の変更をし、話の前半と後半に共通する話題でつなぎ合わせ、新たな一話に成す『御伽人形』の創作手法は、当時の低調な浮世草子作品から抜け出すための方法を模索した結果ではないだろうか。『御伽人形』より二、三年前に刊行された、書名に『御伽』と冠する『御前於伽』（一七〇二年刊）や『拾遺御伽婢子』（一七〇四年刊）が、『訓蒙故事要言』（一六九四年刊）などの類書から一部変更程度の改変で典拠を利用し、翻案している方法とは異なるのである。『御伽人形』には、「夜話」や「御伽衆」の話題に上った話が記されていたように、「御伽」の持つ、自己の見聞を広めるために様々な話を聞かせる情報交換の目的があつて作られたのではなからうか。怪談のみならず、奇談や笑話を含めた本書は、「ハナシ」を提供しようとする姿勢を持つて作られたのだと考える。

『御伽人形』の書名については、高田衛氏が、『御伽人形』のタイトルは、浅井了意の『伽婢子』の題名を踏襲したものである。了意のいう「婢子」とは、「婢子人形」のことで、一首の縫いぐるみ人形のことであるが、小児の夜泣きを防ぎ、また

夜の安全をはかるために、幼児の部屋に置かれたものであった。これをそのままタイトルにして、当時の奇談の集成、そして娯楽をはかったものである」と『伽婢子』の意味を併せて述べている。『伽婢子』については、頼原退蔵氏が、「御伽」の話の意を匂わせた書名でもあるか」と述べている。

怪談の要素が極めて少ない咄や武辺咄、出世話、笑話、奇談、怪談で構成された『御伽人形』とは、戦国大名や將軍の側に仕えた「御伽衆」たちが語る「御伽」の話と、娯楽を重視して作られた話とが重なりあつた作品だといえよう。

【典拠一覧表】

* 提邦彦氏が作成した「『御伽人形』考——初期怪異小説のゆくえ」（『江戸の怪異譚』所収、ペリカン社、二〇〇四年）の典拠一覧を参考に、新たに指摘できる典拠を加えて作成した。

巻	場所	話の分類	典拠既指摘	類話既指摘	新指摘
一の一	甲斐	産女・姑 獲鳥	（前半）『宿直草』三の二・五の一、（後半）『本草綱目』・『奇異雑談集』四の四		
一の二	関東・都・ 牧尾寺	出世譚			『本朝高僧伝』
一の三	北国禪寺	猫また	『多満寸太礼』四の三		
一の四	奈良の都	密通	（前半）『宿直草』五の十一、（後半）『宿直草』五の十二		
一の五	津の国富 田庄・越 前	離魂（蛙）	『宿直草』三の十一		
一の六	不明	盲人・怪 力			
一の七	宇治の里	奇縁	『西鶴諸国はなし』一の三	『観化一声電』	
二の一	甲斐	墓中出生 譚	『狗張子』二の四		『甲陽軍鑑』品第一七
二の二	甲斐	茶器下賜		『茶窓閑話』	『当代記』天正九年二月二十四日の記事 （前半）『宇治拾遺物語』巻第十四の第三、 『昔物語語治聞集』巻四の第十四、（後半） 『古今著聞集』巻第十・三七七、『昔物語 語治聞集』巻二の第四
二の三	越前・都	怪力			

二の四	不明	怪力	『宇治拾遺物語』二の一〇（部分的依拠）		（後半）『宇治拾遺物語』卷十三の六・一六六、『昔物語拾聞集』卷二の第十三
二の五	不明	賢女	吉野太夫説話		
二の六	大坂・秋田・醍醐山	蛇体	『因果物語』（平仮名本の一、片仮名本上の五）		
二の七	西の岡	古狸	『宿直草』三の二		
三の一	甲斐	寺跡論			『甲陽軍鑑』品第四十八卷十八の九
三の二	不明	妬み	『古今犬著聞集』一二、『諸国百物語』四の十七、『本朝故事因縁集』一四二	皿屋敷伝説	
三の三	高野山	蛇柳	蛇柳伝説		
三の四	金峰山	天狗	『新御伽婢子』四の三、『宗祇諸国物語』二の三		
三の五	江戸・都	狐	『江戸砂子』、『三州奇談』などに所収の熊谷稲荷の由来		『筑前国統風土記』卷四「承天寺」、『京童』第四、『洛陽名所集』卷五
三の六	東福寺	寺の利生			『京童』第四、『洛陽名所集』卷五
三の七	稲荷大明神	奇特	『神社啓蒙』、『本朝諸社一覧』、『武家重宝記』四の一、『扶桑怪談弁述鈔』四六		
四の一	都中京・二条通・清水寺	人魂			『袋草子』卷四「見人魂歌」（部分的）
四の二	伊賀名張・四条河原	幻術	『古今堪忍記』四の四、『玉簪木』三の三、『醍醐随筆』		
四の三	比叡山	転生	明智坊伝説（雍州府志一〇）		

五の六	安芸広島	石塔の霊	『武者物語之抄』五		『芸備国郡志』「可児才藏」
五の五	道都 都洪谷街	石塔の霊	『拾椎雑話』二二五		『雍州府志』卷十「陵墓門」
五の四	伊勢国神路山	蟒蛇			
五の三	北国阿曾沼	鴛鴦	『古今著聞集』二〇、「沙石集」七、『本朝故事因縁集』一一七	『法華経直談鈔』一〇、「一休諸国物語」三の一五、「因果物語」片仮名本中の九、「新御伽婢子」二の九、阿曾沼伝説	
五の二	因幡鳥取	大蛇報復			（前半）『古今著聞集』卷第二十・六九九、『昔物語治聞集』卷三の第七、後半「因府夜話」上「平尾氏、軒大蛇事」
五の一	下嵯峨	蘇生			
四の八	大阪中之嶋	蘇生	『百物語評判』四の八（導入部のみ）	譚海一一	『甲陽軍艦』卷十一・六十六
四の七	竹田・川原おもて	灯明の火の魂		『宿直草』五の三、『百物語評判』三の七・四の九、『新御伽婢子』三の八、『西鶴諸国はなし』五の六、『本朝故事因縁集』五七・九一	『東海道名所記』卷六、『河内国名所鑑』卷五「姥が火」
四の六	松野村	累物	『死霊解脱物語聞書』	『古今犬著聞集』一二	
四の五	都新町	夢中の告げ			
四の四	都宇治の里 大道寺村・平等院	念仏の功 力			

五の七	洛東知恩院町	亡妻執心	(前半)『諸国百物語』二の九、(後半)『諸国百物語』五の一八		
五の八	下京辺	偽り			『百登飄飄』巻五の十七
五の九	上京中立 売	生霊・腫 物		『伽婢子』十三の三、『諸国百物語』四の十四	
六の一	北山	転生		『奇異雑談集』一の二、宗祇『諸国百物語』一の六	
六の二	洛陽の 西・大宮	僧の一念			和歌利用『伽婢子』巻三の三、『伽婢子』巻八の三
六の三	肥前島原	島原伝承	『因果物語』片仮名本上の二三、『因果物語』平仮名本三の一四		
六の四	近江唐崎	大蛇退治	『宿直草』三の八		
六の五	信濃・善 光寺	兄妹自害			

【注】

- (1) 石田礼以業「苗村丈伯の著作について」(『三田國文』六七号、二〇二二年十二月)。
- (2) 花田富三夫『御伽人形』の「一典拠」(『江戸時代文学誌』第一号、柳門舎、一九八〇年十二月)。
- (3) 堤邦彦『御伽人形』考——初期怪異小説のゆくえ(『江戸の怪異譚』所収、ペリカン社、二〇〇四年)。堤邦彦「熊谷稻荷の唱導と文芸」(『朱』第五〇号、二〇〇七年二月)。
- (4) 徳田清香『御伽人形』における猫の怪異(『KCU比較文化論集』九巻、二〇一八年)、『御伽人形』における狐の怪異(『KCU比較文化論集』十巻、二〇一九年)、『御伽人形』における蛇の怪異(『KCU比較文化論集』十一巻、二〇二〇年)、『御伽人形』におけるうぶめの怪異(『KCU比較文化論集』十二巻、二〇二一年)。
- (5) 堤精二「御伽人形解説」(『岩崎文庫貴重本叢刊』所収、日本古典文学会、近世編第三—四巻、一九七四年)。
- (6) 法心の名は、『沙石集』『元亨釈書』で確認できるが、木履で打

たれたゆえに修行の道へ進んだ話は、それらには記されていない。
『誹諸破邪顯正返答』（『日本俳書大系』第六卷所収、日本俳書大系刊行会、一九二六年）には、真壁平四郎の伝記について、「一旦志を發して入唐して。仏鑑にまみえ。終に法心坊と名のり。松嶋の円福寺を開基す」と記されている。

(7) 提邦彦『御伽人形』考——初期怪異小説のゆくえ（『江戸の怪異譚』所収、ペリカン社、二〇〇四年）の典拠一覧を参考にした。近松茂矩『茶窓閑話』（享和四年）の引用は、国立国会図書館所蔵本に拠った。

(8) 『当代記』天正九年二月二十四日の記事（『史籍雜纂』第二、国書刊行会、一九一一年）。

(9) 酒井憲二編『甲陽軍艦大成』汲古書院、一九九四年—一九九八年）。

(10) (注3) に同じ。

(11) 桑田忠親『大名と御伽衆』（有精堂出版、一九六九年）。

(12) 江本裕『狗張子』注釈（二）（『大妻女子大学紀要』卷三三、二〇〇〇年三月）。

(13) (注3) に同じ。

(14) 同内容は、『今昔物語集』卷二十三第二十二「相撲人海恒世会蛇試力語」にも確認できる。

(15) 本稿で引用・参照した『昔物語語治聞集』は、元禄十四年板を底本とした、中根千絵・加美甲多・久留島元編著『昔物語語治聞集』（三弥井書店、二〇二〇年）に拠った。

(16) 鳥取県立図書館所蔵本『因府夜話』上・中・下、坂本敬司翻刻、二〇一九年。『雪窓夜話鈔』上、卷四「平尾某大蛇を斬る事」にも、『因府夜話』に登場する「平尾某」が大蛇を斬った話は載るが、『因府夜話』とは内容が異なる。「興禪寺四世寂渾和尚の話に。今の平尾某が先祖三左衛門（輝政）様に仕へ。播州の片辺に引籠り居たりし時に。囲炉裏の自在かきを上より下に蛇はひ下りけり。囲炉裏の側に二三歳の小児の昼寝して。其上に浴衣を打ちかけをけるあり。折節平尾某も囲炉裏の側に座し居たりしが。其の小児を狙ひて下り来るを見るや。前後を覚へず飛かり。蛇の頭を脇差にて斬をとし。其子を抱てにげ出で。また纏ひつきたる蛇の胴体を引つかみ。自在かぎの縄よりいろりの中に引き落したるに。炉中にて大きにはね狂ひたるにより。灰を吹立家内一面真闇になりければ。某も売りに居られず外へ立退きけり。」と記されている。

(17) (注3) に同じ。

(18) 類話には、『今昔物語集』卷第二十八「祇園別当感秀被行誦経語第十一」や、昔話「瓶に隠れた和尚」も挙げられる。

(19) 長谷川強『浮世草子の研究』（桜楓社、一九六九年）。

(20) 篠原進「反・小説の時代——『色三味線』と『曲三味線』のあいだ」（『青山語文』三七号、二〇〇七年三月）。

(21) 野田寿雄「怪異小説の系譜と秋成」（『講座日本文学』第八、近世編二、三省堂、一九六九年）。

(22) 高田衛『大坂怪談集』（和泉書院、一九九九年）。

(23) 頼原退蔵「近世怪異小説の一流流」（『江戸文藝研究』所収、角

川書店、一九五八年）。

*『御伽人形』本文の引用は、松本恵美子「資料翻刻〈増訂・再掲〉『御伽人形』——その一——（『国語と教育』七巻、一九八二年十二月）、松本恵美子「資料翻刻〈増訂・再掲〉『御伽人形』——その二——（『国語と教育』八巻、一九八三年十二月）、松本恵美子「資料翻刻〈増訂・再掲〉『御伽人形』——その三・完——（『国語と教育』九巻、一九八四年十二月）に拠った。

【付記】 本稿は、科学研究費助成事業（若手研究、課題番号・23K12092）の助成を受けた研究成果の一部です。

（おかじま・ゆか／本学非常勤講師）